ルイーズ・ミシェルとニュー＝カレドニア

金　山　富　美

はじめに

ルイーズ・ミシェルの『コミューン 歴史と思い出』は，パリ・コミューン前後の歴史を証言する記念碑的な作品であると同時に，著者が未来に向けて放った遺言ともいえる。そこには来る時代が次のように語られている。

> 人類の古き血の混じるこれら原始の人種の人々の間から，旺盛な力がほとばしり出るだろう。人間は一粒の種のように天に向かって伸びていく。[1]

「人類の古き血の混じるこれら原始の人種の人々」と形容されるのは，民衆である。コミューン裁判の判決によるニュー＝カレドニア流刑を経て，帰国してからこの世を去るまでの24年間，ルイーズはヨーロッパ，北アフリカを精力的に旅し，新しい時代の主役になるべき人々に，彼らがコミュヌーという英霊の継承者であるとメッセージを送り，その進むべき道を指し示したのだった。

前論考[2]では，詩人を夢見たルイーズの若き日から，その後，「未来」や「思想」といった概念さえ理解困難な民衆に伝道を続けていった足跡を辿ることによって，「赤い処女」と通称されるこの女性に「民衆の吟唱詩人」というもう一つの形容を与えるに至ったが，彼女の世界観とその言葉の力をより深く探るために，本論文ではニュー＝カレドニア流刑に焦点をあてたい。

さて，ルイーズはフランスから二万キロ離れたかの地へと流される途上で，「どのような人間であれ権力を手中にすると，弱いか利己的な者なら罪を犯してしまうだろうし，献身的で精力的な者であれば消滅させられてしまう」[3]と悟り，後年それが「無政府主義に開眼」したきっかけだったと告白するが，流刑は結果的に７年で終わったものの，当初彼女に科されていたのは終身流刑で

---

[1] MICHEL Louise, *La Commune - Histoire et souvenirs,* La Découverte, 1999, p.333.
[2] 拙論，「ルイーズ・ミシェルの詩学」『島大言語文化』第36号, 2014年３月，pp.45-66.
[3] *La Commune*, p.310.

あったのだから，復路の望みがない往路のさなかに，何らかの社会活動に関わる発想にまで至ったとは考えにくい。ルイーズが敢えてそう強調するのは，奇跡的に帰国を果たし，活動を再開するなかで，ニュー＝カレドニア行きを幾度となく思い返し，その時期が彼女の後半生の大きな転換点となり，コミューン亡き後の彼女の歩みを決定づけたと認識を新たにするからであろう。かの地での暮らしを通してルイーズが見出したものは何だったのだろうか。

詩人ユゴーを精神的かつ芸術の上で「兄」と慕いながら「ア・ベ・セーの友」となり，さらに「兄」を超えて「ア・ベ・セーそのもの」となったルイーズの歩みには，アナーキストとしての立ち位置と「民衆の吟唱詩人」としての立場とが矛盾せず，二つが融け合ってこの人物の核となっている。ルイーズ・ミシェルを他に例を見ないアナーキストに鍛え上げ，同時に民衆を鼓舞する詩人に熟成させた秘密を，ニュー＝カレドニアの日々の中に探る。

Ⅰ．監獄要塞への旅路　―自然との交感と共鳴―

ルイーズたち流刑囚を乗せたヴィルジニー号がロシュフォールの港を発ったのは1873年 8 月28日，ニュー＝カレドニアには同年12月10日に到着する。スエズ運河はすでに完成していたが，罪人のために高い通行料金を支払う必要はないと，ヴィルジニー号はもっとも遠い航路を通った。

大多数には過酷な 4 か月の船旅であったが，ルイーズは後年，生暖かい潮風を心地よく感じながら喜望峰とその後ろに広がる海原を見つめた日々を，昨日のことのように懐かしむ。南アフリカの暑さが突然に南極の寒さに変わると，うっすら雪化粧した甲板に穴の開いたエスパドリーユで出ていき，氷山の美しさに目を輝かせたことも忘れてはいない。

次の詩は，南極を過ぎてインド洋に入った頃に書いたものと思われる「ヴィルジニー号船上にて」である。

見よ，波と星々の間から
あれら白い漂流物が浮かび出るさまを！
船団は帆を一杯に掲げ
広大な深淵の中に漂う。
蒼空の中には宇宙の船団，
海上にそれら金色の切り子が

燐光を放っている。

そして漂うそれらの輝きと，
失われた遥か遠くの世界とが，
瞳を交歓させる。
漠とした歌声があちこちに響き，
新たな伝説の門出に
ガリアの雄鶏が翼はためかせる。
ブレンヌス[4]よ，新年おめでとう！ブレンヌスよ！

これら渦潮の眺めに陶然として思う，
もっと高く波打て！もっと強く風吹けと！
生きることはあまりにも窮屈になった，
夢がここで広大であればなおさら！
ああ，それならばいっそ，
自然の力に粉砕され，
存在を根源のうちに返し，
激流に混ざり合わせてしまおうか。

帆をふくらませるがよい，嵐よ！
もっと高く波打て！もっと強く風吹け！
稲妻はわれらが頭上に光るがよい。
船は，前へ，前へと進め！
単調なそよ風が何になる？
サイクロンよ，翼を拡げよ！
われらはぱっくりと開いたその深淵を突き抜け進もう！[5]

渦巻く海にもまれ，奈落の底に沈むかと思えば波頭に浮かび上がる旧式のフリゲート艦，帆をすべてたたんで嵐に痛めつけられるヴィルジニー号を，ル

[4] 紀元前 4 世紀にローマに侵入したという，勇猛なガリアの一部族の王の名。
[5] *La Commune*, pp.309-310.

イーズは「船の骸骨のようだ」と語る[6]。

船乗りさえ怖れるサイクロンをものともせず，ひたすら興奮して，荒れ狂う波と風をまるで友とするかのように歌うのは，作者がロマン主義の洗礼を受けたということ以上の理由による。ルイーズは，コミューンの痛ましい崩壊と深く敬愛していたフェレとの死別を経て，自己の魂を亡くなったコミュヌーたちのそれとぴったり重ね合わせているのだ。彼女は自らを，「船の骸骨」つまり幽霊船の乗客とみなしている。「白い漂流物」「燐光」は，彷徨うコミュヌーたちの魂のようにも思われ，彼女に親しい。ルイーズは，すでにこの世から去りながら，いまだ命を十分に燃やし尽くしてはいないとでもいうかのように嵐の中に出現し，稲妻と渦巻く波とともに咆吼するコミュヌーそのものとして歌い，遙か古のガリア王の霊とも挨拶を交わす。

その一年前，ユゴーの目を通して語られた軍事法廷でのルイーズの姿を思いだそう。

> 戦うこと，夢見ること，そして苦しむことに疲れた君は，「私は殺した！」と言った。君は死にたかったのだ。
>
> ［中略］
>
> 君は墓場に接吻を送っているようだった。[7]

ルイーズを久しく死の誘惑がとらえていたことは，フォレ教誨師への書簡からもそれと知られる[8]。だからこそ却って，その傍らではあらゆる人間の所行が藻屑でしかないような，大いなる自然からの洗礼を，彼女は身体一杯に受け止めることができたのではなかろうか。「自然の力に粉砕され，存在を根源のうちに返し」たいというルイーズの望みは，彼女がおそらく心の奥底で期待していたであろう，船もろともの消滅とは異なる形で叶えられる。サイクロンに象徴される自然の凄まじさと美しさに自らの人間存在を揺さぶられ，彼女は人工的なもの，あらゆる観念的なものから自由になろうとするのだ。それを詩人は

---

[6] *Ibid.,* p.310.

[7] HUGO Victor, « *Viro Major* », *L'Année terrible*, Gallimard, 2002, pp.293-294.

[8] Voir : « Lettres à Monsieur l'Aumonier - de la prison d'Auberive », MICHEL Louise, *Je vous écris de ma nuit – Correspondance Générale 1850-1904,* Max Chaleil, 1999, pp.150-183.

「新たな門出」と形容する。失いかけていた生命力を取りもどしながら，彼女はブレンヌスに「新年おめでとう」と季節外れのメッセージを送っている。

ニュー＝カレドニアは 3 年ごとにサイクロンに見舞われたが，ルイーズはそのたびごとに，この自然の脅威を新たな期待とともに歓迎することだろう。

> 風と海が猛り狂い，咆哮し，嵐の軍歌が響き渡った。そんなとき，思考は中断されて，われわれは風と波に連れ去られ，空の闇と太陽の闇とのあわいにいるかのようだった。［中略］夜間にくるサイクロンは昼のときより美しい。[9]

船上での自然との交感には，「兄」ユゴーが歌い上げたその偉大なる力への賛美だけではなく，生き物を通してのそれもあった。「蒼穹の王者」でありながら「その大きな羽」のために「甲板上の不格好な道化者」とボードレールに歌われた[10]アホウドリ，この孤島をすみかとする巨大な海鳥は人間を知らないため人見知りなどせず，群れをなして船に寄ってくる。美しい飛翔に比して陸上で際立つ不器用さが水夫に嘲笑され，羽毛採取どころか退屈しのぎに捕獲されて拷問を受けた。その哀れな姿を目にしてルイーズの胸は張り裂けるほどに痛み，思わず水夫にとびかかったこともあった。

その感情は，アホウドリに自らの境遇を重ねたボードレールのそれと同じわけではない。ルイーズはこの「喜望峰の羊たち」[11]の悲しげな瞳を見つめながら，「人間という動物」が自分たちより劣等とみなす他の動物に対してなす無慈悲に対する怒りと，無言のうちに喘ぐ動物への深い憐憫の情[12]に突き動かされていたのだ。さらに，しばしば命を落とした船乗りの生まれ変わりとみなされることもあったこの鳥を，前掲の詩の「波と星々の間から」現れる「白い漂

---

[9] *La Commune,* p.318.

[10] BAUDELAIRE Charles, « *L'Albatros* », *Les Fleurs du mal*, Imprimerie Nationale Paris, 1978, p.58.

[11] *La Commune*, p.310.

[12] フランスでは1850年に動物虐待を禁止するグラモン法が制定された。教育の分野では，マリ＝パップ・カルパンティエが1858年『子供のための博物・事物の話』を執筆刊行，その後カルパンティエ著の『動物学―視覚の教育―』（1869年），『動物学』（1873年）は初等教育教科書として用いられている。私塾教師のルイーズがそれらの教科書を知っていたのは間違いない。Cf. 拙論「マリ＝パップ・カルパンティエの『動物学』と新しい市民教育」，『女性空間』第27号，日仏女性研究学会, 2010, pp.63-74.

流物」と照応させて理解することも可能だ。人間の動物に対する虐待と動物の苦悶のさまは，ヴェルサイユ政府というフランス社会の強者が同じ国民であるコミュヌーや民衆に与えた不正と，コミューン崩壊後なおも鞭打たれるコミュヌーの悲哀と重なって見えたのではなかったか。

Ⅱ．新しい友人と戦いの歌

単純流刑囚はニュー＝カレドニア本島から南東に位置するパン島に，要塞流刑のルイーズたちは首都ヌメアから約15キロ離れたデュコ半島に，さらに徒刑つまり強制労働の囚人はヌー島に送られることになった。遡ること20年前，この地はナポレオン三世治下，植民地主義のもとで一方的にフランス領土とされていた。1863年にニッケル鉱が発見され，翌64年からは 8 年以上の拘留を科された罪人の流刑地となり，鉱夫としての労働が強いられた。デュコ半島の海岸には大砲が並び置かれ，厳しい自然と粗末な食事，過酷な労働や折檻に耐えきれず逃亡を企てる囚人を狙っていたという。

仲間を慰め，周囲には孤独を感じさせない風のルイーズだったが，息子を亡くしたばかりのユゴーへの手紙―「ご子息とともに，ご自分も死者のようにお過ごしではないかと拝察します。私もまた，もっとも勇敢でもっとも親しい兄弟たちとともに死に浸っています。死は生よりも価値があるというのは真実だと思われます」[13]―が打ち明けるように，相変わらずその心はこの世にはないコミュヌーとともにあった。周囲では仲間が次々と病に倒れ，ある者は狂気のうちに死に，またある者は自ら命を絶ってユーカリの生える塚に埋葬された。いずれも死んでようやく自由になれたのだとルイーズは思う。彼女の救いとなったのは，その溢れんばかりの好奇心と，フランスとはまったく異なる文化をもつ人々との出会いだった。

島には，1871年のフランスの侵略に立ち上がったアルジェリア北部のカビリアの民も流刑されていた。「パリの叛徒」との間で関係をもつのは禁じられていたが，ルイーズは反乱軍の指導者の一人であったエル・モクラニと深い友情を結び，アラビア人の善良さ，素朴さ，そして豊かな伝統と人間性に感銘を受けている。このことが，後年，幾度となく北アフリカを講演旅行する背景にもなるだろう。だが，特に「民衆詩人」ルイーズに大きな影響を与えたと考えら

---

[13] « Lettre 215 », *Je vous écris de ma nuit*, p.214.

れる友人は，フランス人が「カナックcanaque」と呼ぶ島の先住民だった。

ヨーロッパ人は彼ら先住民族の土地を奪い，その先祖の墓を荒らして牧場や農地を広げる侵略者だった。管理局は部族の生活から離れて風来坊同然となった一部のカナックを言葉巧みにまるめ込み，自分たちの粗暴なやり方で訓練して番犬代わりに利用した。しかも自分たちの振る舞いは棚に上げて，彼らを野蛮人呼ばわりし，流刑囚以上に軽蔑した。カナックの大多数は森の奥や涸れた土地へと追いやられたあげくに，限られた地域で猟や漁をし，ごくわずかなタロイモを分け合って生きていた。

ルイーズにとって衝撃だったのは，同じ横暴な権力に虐げられたはずのコミュヌー仲間があからさまに示すカナックに対する無理解だった。管理局とほとんど変わらず，男たちは何か月たってもカナックに「劣等人種」のレッテルを貼り，女性たちは子供がこの島の「食人鬼」の餌食になりはしないかと怯え続けた。ルイーズは偏見にとらわれた「文明人」ほど頑迷で狭量な人間はいない，と認めざるをえなかった。彼女自身は，ヴィルジニー号に島に関する書物を持ち込み，船旅の間にその自然や動植物層についてかなりの知識を蓄えており，先住民とその文化に対しても同様だった。

カナックにほとんど偏見をもたない稀有な抑留者の一人であり，むしろ彼らから多くを学びたいと願っていたルイーズは，まもなく監視兵の食堂で料理を手伝うダウミという名のカナックの青年を最初の友として得る。彼にフランス語を教え，彼からは部族の言葉を教わって，ある程度言葉を操れるようになると，自然のままで生活している部族のもとに出かけ，彼らの祭に立ち会い，彼らが誇りとする数々の口承伝説や歌を聞いては手帳に書き留めた。数年後，彼女はユゴーへの手紙に嬉々として，今後一年程度カナックの部族とともに暮らし，彼らの伝説をまとめてみたい，彼らのための学校も開きたいと書くだろう[14]。

> 白い人，どこから来たのだ？あの丸木舟の翼倉をつくるにはずいぶん樹皮を編み，ずいぶん木を彫らなければならなかったな。
>
> ［中略］
>
> おまえの国では，毎日食事をするという。朝に食事を抜くのは不愉快で

[14] Voir:« Lettre 241 », *ibid.*, p.238.

あるかららしい。それほどの豊かさを私たちに与えてくれるのか。
白い人は何も語らず，何も与えてはくれない。白い人は，この地に仲間とともに居ついて，種をまき，それを薄い肌の者同士で食べ，自分たちだけのものにする！私たちは彼らを兄弟として迎えたが，彼らの方はそうではなかった。
白い人たちがやって来てからは，あれほど穫れたイモも，収穫祭も，何もかもがなくなってしまった。[15]

純朴さと平和主義的姿勢から「兄弟」と信じた白人につけ入れられ，思いがけないその裏切りを悲しく歌う人々にルイーズは心打たれ，彼らを知れば知るほどに一層深く理解したいと考える。森に住むカナックは彼女を「タイオー（友人）」として受け入れ，部族の儀式に招待した。その様子は『カナックの伝説と武勲詩』に詳細に記される。

ピル＝ピルと呼ばれる踊りでは，女は脇により，男たちが輪になって一つの方向へ，そしてまた逆の方向へと踊る。動きは次第に早くなり，しまいには炎を横切っても火が身体をかすめもしないほどに素早くなる。
［中略］
長老の語るところによれば，昔は歌と踊りが一晩中続き，その途中で一人，時には数人が大勢の踊り手にのみ込まれて姿を消すこともあったらしい。［中略］男性と女性が入り交じる踊りの列では，大漁，豊作，結婚，葬式を模した踊りがくり広げられる。
［中略］
4分音で成るカナックの人々の音楽は，風の音，森のざわめき，あるいは波に似て，ときに優しく，ときに荒々しく，そしてときには木の葉に滴る雨のしずくのようである。[16]

当時の文化人類学は植民地の開発や拡大に利用されることが多く，いずれは

---

[15] MICHEL Louise, « *Les Blancs* », *Légendes et chansons de gestes canaques (1875) suivi de Légendes et chansons de gestes canaques (1885) et de Civilisation,* Textes établis et présentés par François Bogliolo, PUL, 2006, pp.63-64.

[16] « *Musique et danse canaque* », *ibid.,* pp.147-148.

消えゆく「蛮人」の観察という目的をもっていたが，ルイーズの記録はそれとは明らかに異なる。その描写は，自然に抱かれながら精霊とともに生きるカナックの人々の匂いを伝え，その文化への共感に溢れているといえよう。観念的というより精神の，あるいは魂の寄り添いがあり，語る言葉には分析的なものというより感覚と音楽的なものが見て取れる。ルイーズは，少女時代に親しんだ豊かで神秘的な自然[17]と人間とが一つに溶け合った情景を目の前にして，静かな感動を覚えていたのに違いない。

だが，争いを好まないカナックの人々の忍従も，植民地主義のもと，フランスの庶民や労働者以上に搾取され続けた末に[18]，ついに限界に達する。

カナックの大蜂起は1878年 6 月25日に始まる。先頭には大族長アタイが立ち，いくつかの部族がそれに続いた。圧倒的な武力の差にもかかわらず，蜂起は数ヶ月続く。カナックの「戦いの歌」をルイーズは忘れないだろう。

カ　コップ（なんと美しく見事なことか）
メア　モア（赤い空）
メア　ギ　（赤い斧）
メア　イエプ　（赤い炎）
メア　ルイア　（赤い血）
アンダ　ディオ　プラ　（お別れだ）
マテルス　マテルス　カシュマス　（勇敢な人々よ）[19]

ルイーズは彼らの勝利を心から祈り，密かに協力さえしている。ある晩，仲間の戦いに加わるために別れを告げに来た親しいカナックに，かつて獄中のフェレに送った赤いカーネーションのように，肌身はなさず身につけていたコ

---

17 Voir:「ルイーズ・ミシェルの詩学」p.48.

18 その背景には，たとえばフランス海軍大臣フーリションが議会で述べたような，先住民族に対する驚くべき認識があった―「カレドニアの先住民は頭がよいが，邪悪な怪物である。当地で安全に生活するためには，この住民を絶滅させる必要がある。徹底的にやる唯一の方法は三十人ほどの兵隊からなる分隊を組織して，フランスで狼狩りをやったように駆り立てること。彼らの耕作地と村を荒らし，雨期が近づいたら日に数度一斉手入れをすることだ」: Cité par Germaine Mailhé dans *Déportation en Nouvelle-Calédonie des communards et des révoltés de la Grande Kabylie (1872-1876)*, in *Louise Michel - exil en Nouvelle-Calédonie,* Magellan & Cie, 2005, p.107.

19 *La Commune*, p.312.

ミューンの赤い腕章を裂いて与えた。数か月後には，血の海の中で鎮圧されたカナックの悲惨さをユゴーに伝え，未亡人や遺児を救うために当時執筆中の『カナックの伝説と武勲詩』の序文を書いてほしいと打診している[20]。

後年，ルイーズは英雄アタイの最期の姿を記すために『コミューン』の数ページを割かずにはいない[21]。ここで注目しておきたいのは，戦いを前にした大族長の傍らに，一人のタカタが描写されていることだ。タカタとはカナックの医者であり，魔術師，また司祭でもあり，そして何より戦場の「吟唱詩人」である。この人は森で「亡霊の枝」とも呼ばれるアドゥエケを摘み，戦士に分け与える。戦士はその草で自らを鼓舞し，また傷を癒すのだ。カナックのタカタは「誇りに満ちた心」をもち，自由を守ろうとして，アタイとともに殺された。

われわれは，ここで，コミュヌーとカナックの戦士が，さらに赤い腕章とアドゥエケの草とが，同一のものとして捉えられていることを理解する。アタイの部族のタカタの名はアンディアと明記されており，「ア・ベ・セーの友」のアンジョルラス[22]を思い起こさせるが，これは偶然なのだろうか。吟唱詩人ルイーズの姿がタカタと重なり合う。

ルイーズは「あのアタイの軍歌がこれからもカナックの人々の思い出の中に鳴り響いてほしい」と祈る。そう強く願いながら，虐げられた人々のために，彼女もまたアドゥエケとなる鼓舞と癒しの言葉を探し，自由と解放のための「戦いの歌」を紡いで届けようとすることだろう。

Ⅲ．自然が教える人間の条件

ニュー＝カレドニアでの流刑生活は言葉に尽くしがたい過酷なものだったが，その風土や自然についてルイーズは不満を抱くどころか，許されるかぎり島巡りをして多くの発見を楽しんだ。野生の島のあるがままの姿がルイーズの人間性とぴったり合っていたことがうかがわれる。自然とともに生きるカナックから多くのことを教わるなか，彼女はさらに自然を師として，人間の条件について哲学をしている[23]。

---

[20] Voir: « Lettre 252 », *Je vous écris de ma nuit*, p.243.
[21] *La Commune,* pp.329-332.
[22] Voir:「ルイーズ・ミシェルの詩学」pp.52-54.
[23] Voir: *La Commune*, pp.314-318.

森にはタカタに予言の力を与えるという「聖なる木」ニアウリをはじめ，大きさも種類も多様なシダ類，さまざまな種類のツル植物が繁茂し，それぞれの植物がそれぞれの実をつけていた。ルイーズは海岸近くの小さい円丘で，ブドウ状に実のなる植物が力強く伸びていることに気づき，ヒバマタ科の海藻が陸に進出したのではないかと推察する。ある場所に根づいたニアウリが，サイクロンの激しさにねじ曲げられながらもその枝を腕のように突き出して成長を続ける姿には，驚嘆させられた。

生きるために賢明に生を模索する自然の知恵を手本にして，ルイーズ自身も頭をひねった。デュコ半島は貧弱な砂地で野菜はほとんど育たない。しかも，年に二回イナゴが飛んできて，仲間が汗水たらしてこしらえた菜園も一瞬のうちにむさぼり尽くしてしまう。この自然の厄災はルイーズに，コミューン壊滅後に獄中の彼女を苦しめ，また彼女の仲間の命を奪った残酷な冬を思い出させた。

かの地は冬のさなか，大気は冷え鉛色の空。
スフィンクスが世に現れるがごとく，
新年の大地白く覆われ，
雪厚く降り積もる。当地は灰色，
羽降り積もる。バッタ群れして
宙を旋回。

遠くの峡谷に到達した彼ら，
山を支配し，広野を埋め尽くし，
地上を覆って海のごとし。
恐ろしい顎の砂漠の蜂は，
篩かけの音立て森を襲い，
実りを奪う，冬枯れのごとく。
［後略］

（「新しき年」より[24]）

[24] MICHEL Louise, « *Nouvel an* » (janvier 1879), *À travers la vie et la mort,* – Œuvre poétique recueillie et présentée par Daniel Armogathe avec la collaboration de Marion V. Piper, La Découverte, 2001, p.144.

ところが，流刑囚の生きる希望を打ち砕く「灰色の雪」のようなイナゴの大群からも，ルイーズは新たな発想を得た。イナゴが人間に都合のよい植物を食ったとしても自然は何かを残してくれているのでは，と考えたのである。観察を続けた結果，イナゴはトウゴマが苦手らしく，それだけは食べ残していることを知る。トウゴマはデュコ半島の至るところに繁茂しているのだから，それで蚕を養ったらどうだろうと思いつき，彼女は蚕の卵を送ってくれるよう本国の学者に手紙を書いた[25]。

西の森に水平に枝をはる一本のオリーヴの木もまた，この白人のタカタに自然の秘密をささやいてくれた。その木陰は，どんな季節でもどんな時間でも洞窟のように涼しく，そこに座るだけで疲れた身も心も癒されるのである。見れば，不思議なことに害虫一匹寄りつかず，葉も実もつややかな濃い緑色をしている。ルイーズがこのオリーヴの樹液を虫のついた別の木に注射してみると，内側に巣くう虫が慌ててはい出してきた。デュコ半島のパパイヤに萎黄病が大発生した際にこの経験を応用すると，大半のパパイヤが枯れることなく，たくましく成長して多くの実をならせた。ルイーズは「樹液が強いこの地方では，植物を人間と同じように扱うことが可能だ」[26]と記録する。

散策中に出会い，ルイーズの小屋にいつくようになった野生の猫にも驚かされた。200年前にクック船長がヨーロッパから連れてきた飼い猫の子孫であろう彼らは，後ろ足で身を支え，兎のように飛んで獲物をつかまえる。その習性は，森の中で生き抜くために身につけたものに違いない。

ルイーズはニュー＝カレドニアの自然に抱かれて，人間も本来は大いなる自然のもとにあるはずだと理解した―「植物は環境の激変に挫けず，自ら新しい器官を備えた生物に構造を変化させて生き延びる。ところが，これらの植物にくらべて，人間は本性として与えられているはずの自由をいかにして使うか，その方法さえ身につけていない」[27]。人間は自由の意味さえまだ分かっていないのではないか，人間はもっと自然を信頼するべきだ，とルイーズは悟る。

自然を歌うルイーズの詩は，かつての作品よりもいよいよ感覚で音楽的なものとなるだろう[28]。生きとし生けるもの同様に植物に信頼を寄せるカナックの

---

[25] 養蚕業は当時フランスが力を入れていた産業のひとつだった。
[26] *La Commune*, p.316.
[27] *Ibid.,* p.315.
[28] ルイーズが幼少時代から音楽に親しみ，ピアノも巧みであったことを思い出そう。彼女の

人々に学び，植物に語りかけ，そして彼女の詩に耳を傾ける人々に，彼らが本来もつ自然の力を思い起こすようにと呼びかける。

巨大な波でできた奇妙な花，
おお，赤い樹枝の珊瑚！
多くの老いた世界を重ね連ね
多くの新たな世界を支度する

おまえだ，蒼白な死の手を
われらに差しおろすのは，
港から遠く，貪欲な渦潮の底に
船が没するとき。

おまえの絡み合う枝の下
なんと多くの神秘と多くの時代があることか！
また，なんと多くの国民が圧縮され
おまえの陰に永遠にあることか。

波も砂もない，
破壊された大陸を覆い，
驚くべきおまえたちはほどなく，
別な礁に再び自らを注ごうとするか？

そのとき，われら不完全な民の上に
おお，血色の樹枝の珊瑚，
別の頂きを築いてほしい，
公正で偉大な人々のために。

（「珊瑚の花」[29]より）

音楽的才能は，カナックの唄や踊りに触れることによって，原始的で人の魂を底から揺さぶるリズムを習得したのではないだろうか。

[29] « *Fleur de corail* », *À travers la vie et la mort*, p.123.

「植物を人間と同じように扱う」姿勢は，さらにルイーズを次のように歌わせる。

部族の木，ニアウリの下で，
われらはさまざま入り混じる呟きを波に聴く。

夜明けがやってくるはず，
どんな夜も朝を秘めているのだから。
昨日が夢でしかないような者にも，
風に揺れそよぐ野草は種子をつくってくれるだろう。
波がうねり，時が流れて，
砂漠はやがて都市になるだろう。
荒波打ちつける円丘の上，
ユマニテが動き始める。
［中略］
ニアウリの木々にサイクロンがうなる。
潮風よ，吹き鳴らせ，おまえの単調なラッパを！
（『ニアウリの木の下で』[30]より

ニアウリに人間の姿が重なる。その木は原始の力を秘め，たとえサイクロンによって倒されたように見えても，ユマニテつまり「人間愛」という種を残して荒涼な土地にも根づき，緑を生み，新しい町をつくっていくのである。

おわりに　―サイクロンと新世界―

ルイーズ・ミシェルの詩にしばしば現れる「サイクロン」を，カペラは「ルイーズの心をかきたて，師と仰ぐユゴーに近づかせる強い霊感の源」[31]と捉えている。だが，われわれは今，この強大な破壊力をもつ自然現象に対するルイーズの執着について，より正確に理解することができる。

ニュー＝カレドニアへの往路で歌われたサイクロン[32]には，確かにユゴーの

---

30 « *Sous les niaoulis* », *ibid.,* p.132.
31 *Louse Michel - exil en Nouvelle-Calédonie,* p.88.
32 本論pp.2-3の詩「ヴィルジニー号船上にて」を参照。

影響が色濃く，嵐にはコミューンの激しい闘争が表現され，ガリアの時代に遡って戦いに立ち上がった人々の勇姿と崇高さが称えられている。一方でそれは，絶望的な悲しみと口惜しさゆえに，詩人がその身を投げ出してしまいたい嵐そのものである。そこで命を奪われることなく生き残ったからには，コミュヌーであることをもっとも誇りに思う人間の一人として，できる限りのことをしようという思いが，彼女にはある。だからこそ「ヴィルジニー号船上にて」の詩に「新しい伝説の門出」と綴ったのである。

その後，フランスから遠く離れた島でカナックと親しく交わり，彼らに近い視点から自然により添うなかで，ルイーズはサイクロンにより重層的な意味を託すようになった。「ニアウリの木の下で」においては，サイクロンはまずニアウリを脅かすもの，つまり人に与えられる試練，過酷な運命を意味する。だが，タカタの目を備えるようになった彼女は，ニアウリの木にうなるサイクロンに，人を鼓舞して本来の人間性に立ち帰るよう誘う役割も与えている―「荒波打ちつける円丘の上／ユマニテが動き始める」。なぜなら，人間はニアウリ以上の存在であり，本性として自由というものを備えているのだから。そして，そのことはカナックが，また，かつて祖国フランスの先住民ガリア人が，さらに彼女に親しいコミュヌーたちが証明してきたことだったのだから。

師ユゴーがコミューンを否定している[33]ことを十分承知しながら，「私はこの地（ニュ＝カレドニア）でかつて以上にコミュヌーです。過ちと不正を消滅しなければならないあらゆることに対して，私は再び戦いを挑む覚悟をしております」[34]としたためるとき，また帰国後執筆の『コミューン 歴史と思い出』の中でもっとも辛く残酷な思い出《大虐殺―パリの闘い／殺戮》のページに「事物の変化が緩慢でも嘆かないでおこう。その死の腐植土の中で，永年を経た幼芽が成長を続けているのだから」[35]と綴るとき，ルイーズの目には，数知れぬ人々が種となって積み重ねてきた闘争の歴史が，また「いつかの未来」に向けての闘争，戦い続けるための希望，そして自らが「塵埃となるときに生

---

[33] 当初コミューンの理想に理解を示しながらも，その指導者たちが民衆の欠点を増長させて破壊的で非人間的な結果をもたらしたとして，ユゴーは『恐ろしき年』の「タリオン」でコミュヌーを糾弾した。

[34] « Lettre 241 », *Je vous écris de ma nuit,* p.238.

[35] « *L'Héctatombe – La lutte dans Paris : L'égorgement* », *La Commune*, p.246.

きるであろう人々」が手にする「正義，平和そして自由」[36]の美しい幻影が映っている。

7年に亘る流刑を経，恩赦によって帰国した後，ルイーズ・ミシェルはアナーキストの立場を固めた。共産主義であれ，社会主義であれ，そして無政府主義であれ，いずれにも真理があると理解し，ひとつだけが絶対であるとはもはや考えない。たとえ主義主張に多少の差があろうと，革命家が互いに交流し切磋琢磨することが重要であり，その目指すところはただ一つ，いかなる人間もガレー船の奴隷よろしく権力の下で押しつぶされることなく，自由で独立した人間として生きられる世界，人間尊重の社会の実現，新しい世界の創造である。

ニュ＝カレドニアでの体験を通して，ルイーズは虐げられた「ア・ベ・セー」の人々自らが「野生の部族の人々の輪舞のように，旋回を繰り返し繰り返し」[37]，新世界の実現のため，サイクロンというエネルギーとなることを提案する。と同時に，彼女自身は戦いの吟唱詩人タカタとして，真の自由を求める人々の先頭に立って歩むことを決意したのだ，と結論づけることができる。

波乱の人生の中，ルイーズ・ミシェルがさまざまな場所で呼吸するように書いてきた多くの詩は，漸次収集が進められてきている。しかし，それらの内容に研究の目が及ぶまでには至っていない。本拙稿ではいくつかの詩について若干の解釈を試みてみたが，今後はその他の詩に関しても考察を進め，人々の魂に今も呼びかけるルイーズの言葉の秘密をさらに探っていきたい。

参考文献

MICHEL Louise, *La Commune – Histoire et souvenirs,* La Découverte, 1999.

MICHEL Louise, *Je vous écris de ma nuit, Correspondance générale, 1850-1904,* Max Chaleil, 1999.

MICHEL Louise, *Histoire de ma vie, seconde et troisième parties, Londres 1904,* Presses universitaires de Lyon, 2000.

MICHEL Louise, *À travers la vie et la mort,* La Découverte, 2001.

MICHEL Louise, *Lettres à Victor Hugo 1850-1879,* Mercure de France, 2005.

---

36 « *Nouvel an* », *À travers la vie et la mort,* p.144.

37 *Ibid*.

MICHEL Louise, *Louise Michel - exil en Nouvelle-Calédonie,* Textes rassemblés et présentés par Emile Cappella, Magellan & Cie, 2005.

MICHEL Louise, *Légendes et chansons de gestes canaques (1875) suivi de Légendes et chants de gestes canaques (1885) et de Civilisation,* Textes établis et présentés par François Bogliolo, PUL, 2006.

BAUDELAIRE Charles, *Les Fleurs du mal,* Imprimerie Nationale Paris, 1978.

HUGO Victor, *L'Année terrible,* Gallimard, 2002.

GAUTHIER Xavière, *La vierge rouge – Biographie de Louise Michel,* Max Chaleil, 1999.

BERNAND Noël, *Dictionnaire de la Commune,* Mémoire du Livre, 2000.

DUPARC Hélène, *De Paris à Nouméa, l'histoire des communards de la Commune de Paris déportés en Nouvelle-Calédonie,* Editions Orphie, 2003.

DAUPHIN Joël, *La Déportation de Louise Michel – Vérité et légendes,* Indes savantes, 2006.